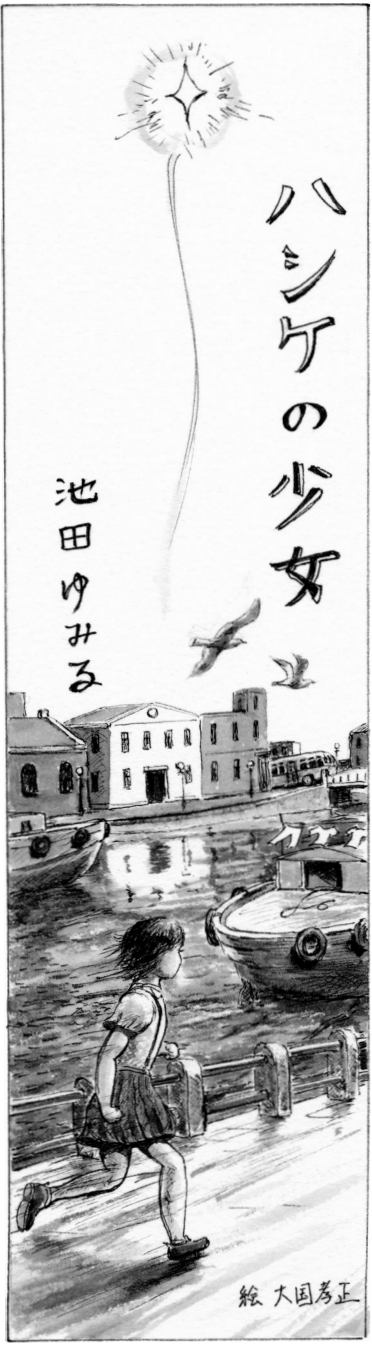
ハシケの少女

池田ゆみる



父親から話を聞いて、恵子(けいこ)はおどろいた。いよいよ自分も、陸(おか)に住むことになるらしい。うれしいけど、なんだか後ろめたい。陸の子と、あんなにけんかしなければよかった。今さら後悔しても、あとの祭り。恵子はさんざん陸の子とやりあって、相手からひどく恐れられている。

「お父ちゃん、学校はどうなる?」

「このまま水上学校でいいだろうよ」

恵子は胸をなでおろした。水上学校は、船で生活する家庭の子どもたちの学校で、仲間意識が強く、みんな仲がいい。ところが、このところ水上学校では、陸の学校に転校する子が相次いでいる。そんなときに、しかも六年生にもなって水上学校を出ていくのは、どうしてもいやだった。それに、この秋に開催される東京オリンピックを、学校の宿舎のテレビで、みんなといっしょに見てみたい。

「じゃあ、中学はどうなるの?」

「ここから近い、石中だ」

それはこまる。けんか相手の陸の子たちが、みんな行くはずの中学校だ。なんとかならないものか。

完成したばかりの石川町駅に近い、中村川にかかる橋の欄干(らんかん)で、恵子は頭を抱えた。

よどんだ流れには、ハシケ船が、数珠(じゅず)つなぎにならんでいる。川にうかぶハシケ船が恵子の家で、船上には洗濯物がひるがえっている。船尾にはセジといって、三畳ほどの空間があり、そこに親子三人が暮らしている。それを、陸に住む子にからかわれ、いつも派手なけんかになる。その